

〔柳亭筆記〕四都の富士

西鶴大鑑大鑑 ○男色にえい山のちごの事をいふ條に、都の富士といふ時花ときばなでの大あみ笠をかづき

とあり、たれくも知る如く、えい山を都の富士といへり、是等も其形によりての名なるべし、

〔傾城色三線〕大坂之卷梅の句ひ吹き渡る大橋

平家の二番ばへ宗盛といへる本の犬盡○中 隴富士といふ大編笠豊○下に著て、

〔柳亭筆記〕四隴富士考べし

役者色仕組享保五年印本に、十七八の犬振袖、紫の絹ちゞみに紅せきの袖べり筋びるうどのはやり結び隴

富士の編笠ふかく犬小のさしぶり、たしかに女と知られたり、これは女の男に出だちたる條に

見えたり、娘形氣、女の身にて我女の姿をきらひ、笄曲いけまがの髪を切てニツ折つに髷まげ出して、若衆めきた

るたてかけにゆはせ、不斷の風俗も裾みじかに裏をふかせ、八反掛の羽織に金ごしらへの中脇

指、おぼろ富士といふ大あみ笠きて云々、これはちかきさうしにて、當時の風俗を記し、にはあ

らず、貞享元祿の頃もつはら編笠のおこなはれしむかしの事をいへるなり、さて是等の笠の名

俳諧の句には見えざれども、其角五元集、富士笠取よ富士の霧笠時雨笠、といふ吟あり、是は富士

の句にて笠の句にはあらざれど、霧や時雨のふりかゝりて、富士の姿のたしかに見えざれば、笠

をかぶりて顔の見えわかぬ人に譬へ、笠をとれよといひかけたるにて、是も隴富士、都富士、富士

おろしなどいふ笠の名ありしゆゑに、富士の霧を笠におもひよせしならんと書のせておきつ、

〔柳亭筆記〕四富士おろし

富士おろしは、編笠の名なり、其形富士に似たるゆゑの名なるべし、西鶴大鑑貞享四年印本四年の頃廿四

五と見えたる人、富士おろしといふ大編笠をぬげば、紫の手細にて頬かぶりして顔は見せざり

きとあり、○中落花集寛文十一年雪やつれて江戸風になる富士風、重頼、